

## 第12回国際18世紀学会について

阿尾, 安泰  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/9218>

---

出版情報 : Stella. 26, pp.91-101, 2007-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# 第12回国際18世紀学会について

阿 尾 安 泰

第12回国際18世紀学会が2007年7月8日から15日にかけて、フランスのモンペリエで開催された。モンペリエは周知のように、先頃急逝された18世紀研究の第一人者であり、『百科全書』研究を一新したジャック・プルースト教授ゆかりの地であり、その偉大な影のもとに今大会が組織されていったようにも思われる。そして、このモンペリエこそ、プルースト教授の指導を慕って、多くの日本人研究者が訪れ、優れた業績をあげることになった経緯は今更言うまでもないことであろう。いわばモンペリエは、日本の18世紀フランス研究の聖地とも言える<sup>1)</sup>。

ただこの小論においては、その刺激的な学会の様子を伝えることを第一の目的とするわけではないことをはじめに確認しておきたい。それは従来からの学会報告の記事となるわけであり、そうした役目をこの小論が果たそうとは思わない。むしろこうした報告記事ではふれられてこなかったことを、欠落してきた部分を以下において問題とし、そこに新たな光を少しでも当ててみたいと考えている。だからといって目指しているのは、決してこれまでのレポートの批判ではない。成果を認めた上で、それを補う形でさらに豊かなものにしていきたいということである<sup>2)</sup>。

従来の報告にもし何か問題点があるとすれば、それは学会の成果を伝えたいと思うあまり、発表を伝えることに終始するという点である。確かに学会発表は重要であるが、それだけがすべてではない。学会というのは参加者の発表だけあれば成立するというものではない。研究者が成果を示す舞台を周到な準備のもとに作り上げてこそ、大会が可能になるわけである。またその研究者たちも急に現れるのではない。しかるべき手続きを経て大会に参加するに至る。これまでの報告では、いかなる準備のもとに大会が運営されていくのかもよくわからなければ、またいかなる手続きのもとに大会に参加すべきなのかも十分に

明らかではなかったように思われる。いわば、大会を運営するための情報も大会に参加するための情報もあり多くはなかったと言うことができる。

こうした状況を踏まえ、ここでは、従来あまり触れられることのなかった大会開催に至るプロセス、そして大会中の動きなどを、具体的な事例を挙げながら、できる限り明確な形で再構成してみようと考えている。

## 1. 大会開催までのプロセス

大会開催までの道のりを辿ってみよう。今大会の場合、前年である2006年の7月下旬頃には、大会の公式ホームページができていた<sup>3)</sup>。そして、ホームページ開設は18世紀研究の支援団体であるVoltaire Foundation等を通じて知らされた。今回の大会で大きな特徴となっているのは、前回の2004年開催のロサンゼルス大会以上にIT化が進んできたということである。それはホームページの充実だけにとどまらない。e-mailが活用され、HP開設とほぼ同時に大会に関するメーリングリストへの参加の呼びかけが始まる。そして、そこへの登録により情報が円滑に参加希望者にいきわたるだけでなく、大会運営側も参加予定者数をつかむことが可能になるのである。こうしたIT化は事務作業レベルでの能率化を促す。インターネットでの参加登録が可能となるとともに、参加費そして（ホテル宿泊、学生寮宿泊を問わず）滞在費をネット上でクレジット決済することができる。こうして事務の大幅な効率化が図れるようになったのである。支払い手続きが完了すれば、メールにより受付の連絡が来るし、それだけでは心配に思える人たちを考慮して、後から郵送による確認書が届けられる。そこには、学会参加の特典としてフランス国鉄の運賃の20%割引券も同封されていた。

こうした新しい試みのメリットとしては、情報の迅速な伝達と更新の容易さがあげられる。プログラムなども従来であれば印刷冊子という形態しかなかったために、大会の直前くらいにしか入手可能でないか、あるいは大会会場ではじめて手にするという形が一般的であった。それが前回あたりから、PDFファイルによるネットでの事前配布が始まった。今大会でも公式サイトに、概略版が2007年1月31日の段階ですでに公開されていた。さらに整えられ、大枠ができて、完全版にちかいものが公開されるのが2月20日で、その確認を求めるメールが大会本部より2月23日に出されている。そして4月末ごろに検

索も可能な完全版への仕上げが行われ、5月10日にネット版プログラムが完成する。これは多数の発表者を把握するための検索機能が充実した優れたプログラムとなっている<sup>4)</sup>。

同時に新たな試みとして特筆したいのは inscription scientifique である。これは、大会登録という事務的なレベルでの手続きとは別に、発表予定者がいかなることをしたいのか、その活動を記録するという研究レベルでの登録である。これも前回にはなかったもので、こうしたデータを研究者同士が相互に閲覧することで、予定していたものに加えて、新たなワークショップなどが形成される可能性なども生まれてくる。こうした点からも興味深い試みと言える<sup>5)</sup>。

また学会は単なる研究発表会ではない。若手研究者の育成という面もある。実際前回同様、若手参加者を対象とした奨学金の募集が当初からなされていた。募集は2月16日に締め切られた。日本の若手研究者もこうした制度を利用して積極的に学会に参加していくことが、今後の課題として望まれる。

こうして準備作業も大会開催1カ月前になるとほぼ終了し、大会に関する最終的な情報がメールを通じて知らされていく。6月15日に大会事務局は、今大会において約1200名の参加が予定されていることを報告している。さらに与えられる情報はしだいにより具体的となっていく。6月19日には、特に学生寮宿泊予定者にたいし、学生寮への行き方の説明が詳細に述べられる。6月26日には大会会場への道順の説明が与えられることになる。この情報が出発前の最後の通知となった。

## 2. 大会の運営について

### a. 交通網

大会開催地モンペリエへの入り方には大別して、空路によるアプローチか、フランス国鉄のTGVを利用してのアプローチかの2つの方法がある。空路の場合はパリから直接その日のうちに現地入りも可能であるが、列車による場合はパリで一度宿泊をしてからのほうが疲労が少ないようと思われる<sup>6)</sup>。

そして、市内の移動については、大会事務局の指示するように路面電車による移動が便利である。当初は遅く感じられる路面電車であるが、各宿泊施設と大会会場を効果的に結ぶには最良の手段であることがだんだんわかってくる。都市の規模と行動範囲などを考えれば、実に効率的な機関である。この点で前

回開催のロサンゼルス大会においては、町の規模が大きく、学生寮に宿泊した場合は便利であるものの、市内のホテルに宿泊した参加者にとって、大会会場に行くのに時間的に有効な機関としてはタクシー以外にはなかった事例とは大きな違いがある。町の規模と交通機関と宿泊施設とのバランスが大会運営の上で大きな要素となると言える。またこの交通機関利用に対する大会事務局の情報提供も少なからぬ役割を果たしている。

また、この公共交通機関の利点はその経済性にもある。もともと高くない運賃であるが、回数券あるいは1週間通しパスなどを購入すれば、さらに安くなるのである（ただ、回数券はふつうのタバコ店でも買えるが、パスは駅近くの交通局の売り場でしか買えないという違いがある）。こうした情報は大会事務局からは得られなかっただので、そういった点も含めて、今後はサービスを充実してもらえば幸いである。

### b. 宿泊施設

宿泊施設はすでに述べたように、大きく分けてホテルと学生寮に分かれる。もちろん後者の方が割安となっている。快適さを取るのならば、ホテルとなるであろうが、最近では学生寮も設備が充実してきている。実際今回のモンペリエ大学学生寮も、建物入り口はオートロックであり、各部屋にはシャワー、トイレがついている他に、LANも標準で整備され、インターネットも快適に使うことができる。こうした点では、ホテルとの差は昔と比べれば少なくなってきている。今回も学生ボランティアの協力で、到着時には、部屋まで案内してもらえるほか、荷物運びといった細やかなサービスも受けることができた。前回の大会では学生寮でここまで配慮はなかったように思われるし、部屋にもLAN設備はなかったと記憶している。

ホテルの利点は、もちろんホテルならではのサービスがあげられる他に、町の中心街に位置する立地の良さと大会会場への近さがあげられる。基本的に路面電車が使えるが、徒歩でも十分会場にはアクセスできる距離である。

ただホテルを取ろうが、学生寮を取ろうが、いずれの宿泊施設にしても、やはりインターネット環境が整っていることが、現在の状況においては必要だということは確かである。前回の大会のときは切実には感じられなかったが、今やそうした設備なくしては、情報の入手ができないばかりでなく、場合によっ

ては発表者同士の打ち合わせにも支障が出てくるおそれがある。さらにもし可能であれば、資料をプリントできる環境が加われば、申し分ないと言えよう<sup>7)</sup>。

### c. 食事について

食事環境についてみてみよう。朝食の場合、ホテルはさておき、学生寮に宿泊した時は、すぐ脇に位置する学生食堂に赴くことになる。入寮時に配布された食券で朝食をとることができる。朝食はパンが3、4種類のうちから2個選ぶことができ、さらにヨーグルトが加わる。ヨーグルトのかわりにフルーツを選択することも可能である。飲み物はセルフサービスになるが、コーヒー、紅茶、ミルクなどを飲むことができる。

また発表会場にはカフェが設置されているが、その施設とは別に決まった時間になると、大会スタッフの手により、会場の特設スペースに用意されたテーブルにジュース、クッキーなどが並べられていく。それは無料のサービスであって、発表に聞き入って消耗した体をリフレッシュしてくれる嬉しいもてなしであった。またその時間が、大会に集う人々にとってティー・タイム兼研究情報交換の機会となっていたことも否定できない。この会場では3日目には盛大な歓迎パーティーが開かれ、出席者たちはそこで料理のすばらしさに舌鼓を打ち、時の経つのも忘れることになった。この宴で遅くなても、この町の治安の良さと安定した輸送機関である路面電車のおかげで、出席者たちが各自楽しげに帰路につけたことは素晴らしいことであった。前回のロサンゼルス大会の時は催しものは実に充実していたが、帰りの移動手段に苦労したことも否定できない。タクシーを捕まえることはそれほど簡単ではないし、夜も遅くなるとバスなどの公共交通機関も本数が減ってきて、速やかな帰宅がむずかしくなるのであった<sup>8)</sup>。

もちろん食事は学生食堂と会場だけに尽きるわけではない。会場周辺にはいろいろなタイプのカフェ、レストランが並び、毎日ヴァラエティーのある食事を楽しむことができる。ただそこはフランスのことであるから、日本の立ち食い食堂のように、早く食べられる場所はなく、店に入って食べる場合はゆとりをもって臨まねばならない。30分以上の時間が割けない場合は、そうした場所で食べることは避けた方が無難である。また大会会場の立地のよさから、さらに足をのばして町の中心地まで行き、食事の選択の幅を広げていくこともでき

る。前回のロサンゼルス大会では、昼食については、会場の UCLA の学食が主な会場となった。そしてそこはカード社会のアメリカであるから、最初の利用時において大会参加者はみずからのクレジットカードをもとにして登録を行い、学食専用の食事カードを発行して、キャッシュレスの食事が可能となった。料金は後日クレジットカードで決済される方式であった。今回は特にこうした登録がなかったのもフランスならではである。この差異は文化の違いもあるかもしれないが、それほど厳密なやり方を採用しなくとも管理は十分可能だという証拠ともなろう。

ただ夜の食事について言わせてもらうと、これも食文化の違いであろうが、午後 7 時前に食事を取ろうとすると、これが実に難しい。つまり、まだ開店していない所が多いのである（もちろんマクドナルドをはじめとするファーストフード関係の店は開いている）。そのような早い時間にはまだ食べないのが普通というわけである。ただ時間を遅めに設定して、店を探すことをはじめれば、この町には様々なジャンルのレストランが存在することがわかって面白いし、地域の治安のよさも手伝って、こうした夜の散策を心地よいものにしてくれる。そして、夜の町を歩いていると、大会参加者たちとすれ違い、そこでまた交流の輪ができるのもこの町のはどよい大きさのためであろう。

#### d. 会場運営

会場の設営の仕方も良く考えられたものといえる。もちろんこの施設自体が国際会議などの大規模な行事を想定してつくられているためであろうが、その良さを最大限に引き出しているように思えた。

まず大会のメイン入り口は建物の 4 階の上部からとなり、そこから降りて各発表会場へと行くことになる。入り口すぐ脇に大会受付があり、あらゆる情報をそこで受け取ることができる。その受付を抜けると、18 世紀関係の出版社のブースが連続して並んでいる。発表の合間などで時間があるときなどは、ここで文献をみながら、また出版社社員と会話をしながら、研究情報を入手することができる。もちろんブースの途切れた先にはカフェがあり、そこでくつろぐこともできる。

前回の大会とくらべるとひとつの施設の中にすべての発表会場があるので、まわる方としては楽である。UCLA の時は会場の区域が限定されるとはいえ、

場所が3、4箇所あるため、それなりの運動量を要したことが思い出される。そして、今回の大会を規定する特色のひとつであるIT化の波は会場運営にも現れている。会場には発表予定を知らせる電光掲示板があるが、その情報がメールあるいは受付へ直接に願い出たりすることで、絶えず更新されるのである。それを目にすることで、参加者は発表テーマの変更あるいは時間の変更、教室の変更などをすぐに知ることができる。

すべての発表がひとつの施設で行われたと言ったが、そこにはある工夫が存在したことを強調しておこう。いくら大きな施設でもこれほど多くの参加者が行う発表にすべて同じような教室を割り振っていては、とても足りるものではない。そこで、あらかじめ多くの参加者が見込まれるような大きなワークショップなどには、もとから施設にある大きな教室を割り振る。その一方で、少人数の参加で密度の濃い討議が予定される催しものには特別のスペースが与えられる。大きなスペースのフロアをパネル等で仕切り、数多くの小規模スペースを確保するのである。特にプログラムにおいて、ルソー、ディドロなどといった18世紀の作家たちの名が与えられているスペースは臨時に作り上げられたものである。参加者15、6名ほどの場合は囲まれた空間の方が落ち着いて討議することができる。そのおかげで実に様々な発表をあまり動き回らずとも聞くことができた。もちろん密閉性は必ずしも完全ではなく、脇を大声で話すグループが通ったりすると議論がしにくくなることもあるが、そこはお互いの協力で騒音を出さないように注意すればいいだけの話であり、このスペース増設方式はメリットが大きいように思えた。

会場の設備については十分な配慮があったと言えよう。大講堂を使った記念講演はパネラーの姿が背後の巨大スクリーンに映し出されることで、部屋の後ろの方に位置する者にも臨場感を与えることができた。また大会最終日のダントン教授の記念講演に予想以上的人が訪れ、収容仕切れなくなったときにも、無理にその部屋に押し込むことをせず、別の教室を準備し、そのスクリーンに講演を映写することで、その部屋でも講演の臨場感を味わえるように配慮したことは適切な処置であったと言える。また各教室には希望により様々な設備が整えられていた。スライドやオーバーヘッドプロジェクターなどの機器の使用も可能となっていた。ただそうした技術関係のスタッフの数は必ずしも多くはないというのが若干の問題点ともいえる。人員が限られているため

に、要求がすべて受け入れられるわけではないし、新たな要求をしようとしても、スタッフを探して、かなりの時間を要してしまうこともある。たとえば、発表用の原稿をプリントアウトしたいと思っても、それを依頼するためにスタッフをさがして回らなければならない。確かに会場の一角にはインターネット・コーナーがあって自由にアクセスできるのはとても便利であったが、プリンターを各自で自由に使えるコーナーも作ってもらえば非常に助かったと思う。こうした不便さから、むしろインターネット・カフェで印刷をした日本人研究者も少なくなかった。あえて希望を言わせてもらうとすれば、スタッフの数の確保と更なる情報機器設備の充実ということになろう。

また、この大会においてメディアとの関係も指摘できるかもしれない。大会期間中に参加者の中の重要な人物を招いてのラジオ討論番組が放送された。フランス・キュルチュール放送においてこの大会を知らしめる上で、大いに貢献したと思われる<sup>9)</sup>。

### 今後の活動に向けて

これまで学会について、準備段階から運営に至るプロセスをたどってきた。いまやそれを踏まえた上で、総括を行い、今後の問題点を指摘すべき時であるのかもしれない。

ただ、ここであえて迂回してみたい。学会発表の詳細な紹介は後日ほかでなされるであろう報告に任せると言いながら、グールモ教授の記念講演に手短に言及することを許していただきたい。その発表は18世紀研究のある種の「順調さ」を問題にしたものであり、そこに潜む危険性を指摘しているように思える。今後18世紀研究および学会のあり方を考える上でも重要な指摘を含んでいる<sup>10)</sup>。

グールモ教授の発表の底流をなしているのは「距離」の意識である。それは同質化を促す動きにたいして、批判的な契機を生み出す作用がある。それは冒頭からも現れていた。司会のドロン教授が紹介において、グールモ教授を今は亡きプルースト教授と並べて賞賛し、プルースト教授がモンペリエの地にあり、グールモ教授がトゥールの地にあって、フランスの18世紀研究を地方において支えてきたことを述べた。これに対し、グールモ教授はさりげなく一線を引く。自分はプルースト教授ほどの才能があるわけではないという謙遜にみち

た語り口ながら、プルースト教授と自分との違いを述べようとする。そこに見られるのは、けっしてプルースト教授に対する何らかの感情的な言及ではなく、そのように中央たるパリに抗して頑張る地方という図式で、各地方がもつ独自性を消去し、地方を一色に塗りつぶして中央を浮き立たせる動きにたいする無意識の警戒の念であったように思える。差異をなくして統合化していこうとする動きは至るところでみられるわけであり、それを意識化する「距離」の感覚が求められるべきなのだろう。

さらに、思えばグールモ教授は冒頭において自己の怠惰さに言及していた。今紹介を受けて学会の記念講演をしようとしているが、自分はこれまでまじめな学会員であったとは言い難く、積極的な協力をしてきたかどうかは疑わしいと言うのである。これも韜晦趣味の言葉と受け取るよりは、学会一筋の中央志向の存在と見られることから距離を置こうとした態度を示すものとも言える。

そして、これまでの研究史を振り返りながら、最近の18世紀研究のある種の盛況ぶりにふれていく。欧米の各地において研究会、展示会などが以前にはみられなかった規模で開催される現状がある。そして、そこにはメディアが介入してくることが多くなってきたことも同教授は付け加えることを忘れない。2007年にはパリ国立図書館において大規模な18世紀展が開催された。こうしたことは喜ばしいのだろうか。グールモ教授の語りからは直接的な批判はあがってこないようにもみえる。実際、グールモ教授はこのパリの展示会に他の同僚たちとともに参加しているのである。しかし彼はそうした動きと完全に一体化しているようにみえない。そうした活動がともすると画一化に向かう動きをはらんてしまうからであろう。皆で話している言葉は同じなのだろうか。研究者たちが無意識のうちに共有していると思いこんでいるキーワードは果たして同じ意味をもっているのだろうか。思いこみの幻想のなかで、一心同体という夢を見ているということはないのだろうか。明言するわけではないが、グールモ教授の言説は、聞く者にそうした疑いの念を吹き込まずにはいない。そのため、この記念講演にたいして批判的な意見を述べるフランス人研究者がいたことも事実である。ただそうした意識を喚起しただけでも、この講演は重要性を持ったといえるのではないだろうか。

グールモ教授の言説に依拠して、最後に今後の問題について考えたい。それは批判意識の重要性ということである。学会はこれまでに発展を遂げてきて、

今回で12回の国際大会を開くという実績をあげている。しかし、数量的な発展性だけを考えてもものではない。数量的な拡大と差異を消し去っていく一元的な等質化が進行していくのであれば、それは好ましい事態とはいえないだろう。

今やこの迂回を踏ました上で、国際18世紀学会の問題点を整理して総括していくべきなのだろう。ただ残念ながら、小生にはそうした資格があるとは思えない。学会の動きについては、ある程度の情報を持っているが、それは実際に自分で見聞きした情報ではないからである。最低限の良識として、こうした2次的な資料だけで問題を論じるべきではないということは十分わかっている。だがそれと同時に、こうした事態についてある程度知りながら、無知を装って、学会のバラ色の未来像を語ることの愚かさもわかっているつもりである。実際、学会の運営方針、委員の在り方から始まって奨学金の配布の仕方、学会参加地域間の格差などにいたるまで、数々の問題が存在しているのである。ここではこうした問題の存在を暗示するにとどめ、それを解決するような批判意識が育つてくることで、18世紀学会が新たな可能性の領域に入ることを願って筆をおきたい。そして2011年のオーストリアのグラーツ大会で、望むべき成果が生まれてくることを心より期待したい。

## 註

- 1) これまでの研究を一新したブルースト教授の業績のうち、代表的なものとしては特に以下のものがあげられる—— Jacques PROUST, *Diderot et L'Encyclopédie*, Paris : Albin Michel, 1962. またモンペリエでの学究生活から優れた業績を上げた18世紀研究者としては、市川慎一、鷺見洋一、原好男、寺田元一をはじめとして多くの方々の名を挙げることができるであろうし、その生活模様については、市川慎一『啓蒙思想の三態』(新評論、2007年)に付された鷺見洋一教授の序文を参照されたい。
- 2) たとえば、日本18世紀学会が発行している学会ニュースは実に的確に国際学会の発表の様子を伝えてくれる。たとえば前回の国際大会については、2004年12月発行の第47号に報告が掲載されている。なおこうした資料は同学会のホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/jsecs/index.html> でも読むことができる。
- 3) 公式ホームページは以下の通りである—— <http://www.congreslumieres2007.org/>

- 4) このプログラムについては [http://www.congreslumieres2007.org/fr/front\\_programme\\_fr.php](http://www.congreslumieres2007.org/fr/front_programme_fr.php) を参照。このプログラムは大会会場の受付で冊子体のものを受け取ることができる。総ページ数 180 を超える見事なものである。
- 5)もちろん言うまでもないことであろうが、研究者たちが自由に交流し合うといつても、登録時にパスワード等の指定があるわけで、セキュリティの保護があるなかでの自由な交流というわけである。
- 6) 大会事務局は、情報として以下のアドレスをあげていた――
- [http://montpellier.aeroport.fr/layer.asp?nav=6\\_10\\_0](http://montpellier.aeroport.fr/layer.asp?nav=6_10_0)
- <http://www.montpellier-agglo.com/tam/index2.php>
- [http://www.mappy.com/mappymoi/map?data\\_id=538398E7-B70A-4CD7-9563-050F0BAD4C1](http://www.mappy.com/mappymoi/map?data_id=538398E7-B70A-4CD7-9563-050F0BAD4C1)
- 7) 今回意外と苦労したのが、発表の配付資料の印刷であった。もちろん大会会場で依頼できるといった情報もあったが、急に大会関係者にお願いできるかどうかわからず、また直接どのスタッフに頼むのかの指示も明確ではなかったので、依頼しにくい状態であった。そこで発表者たちは、モンペリエのインターネット・カフェでプリントアウトする場合が多かった。またホテルの住所などがわからない場合のためには、以下の e-mail アドレスが大会事務局から示されていた―― [hebergement@enjoy-montpellier.com](mailto:hebergement@enjoy-montpellier.com)
- 8) ただ苦労した前回のロサンゼルス大会ではあったが、救われたこともあった。大会主催の素晴らしい映画上映会の帰りにタクシーを待っていたが、なかなか現れなかった。難儀していた我々 3 名ほどの日本人のために、大学のスクールバスの運転手がわざわざ巨大な UCLA のスクールバスを出し、3 名だけを乗せホテルまで送ってくれた。このスクールバスのドライバーには大いに感謝している。
- 9) 日本人として驚見洋一教授が出演した他には、次のふたりが番組に登場した――  
Robert DARNTON (USA), Theresa KOSTKIEWICZOWA (Poland).
- 10) Jean-Marie GOULEMOT, «Retour public aux Lumières et recherche dix-huitièmiste».